

ほんとうの宮本武蔵

剣豪、剣聖と言われ、江戸時代から今日まで多くの物語や小説で著され、皆さんご存知の仁です。

小説で最も人気のあるものは吉川英治作の「宮本武蔵」でしょう。

宮本武蔵は16世紀末から17世紀半ばまで無敗の兵法者（武芸者）として活躍した実在の人物です。

しかし吉川英治「宮本武蔵」に出てきて脇役として活躍する又八（武蔵の竹馬の友）、お通（武蔵を慕う娘）、お杉婆（又八の母親）は創作上の人物で架空の人です。吉川英治の「宮本武蔵」は巖流島での佐々木小次郎との戦いで終わります。

巖流島以降の武蔵のことや武蔵の出生地、実際の試合のこと等は史実でははっきりしないことが多いのです。ここでほんとうの「宮本武蔵」を分かる範囲で見てみましょう。

先ず出生地ですが二か所の説に分かれます。

①播磨国（兵庫県）説

- 「^{ごりんのしょ}五輪書」（武蔵の自著）の序論によりますと“^{しょうこくはりま}生国播磨の武士”とあります。（兵庫県）
- 「二天記」（武蔵の弟子の子孫編集の伝記）は“播磨に生まれる”
- 「^{はりまかがみ}播磨鑑」（18世紀中頃の編集の地誌）では“^{いっとうぐんいかるが}播磨国揖東郡 鵜辺の宮本村の産”（兵庫県揖保郡太子町宮本）

②美作国（岡山県の東側の地域）説

- 「^{とうさくし}東作誌」（19世紀の編集で、世に出たのは明治42年）によりますと、美作国^{あいだ}英田郡宮本村”（岡山県美作市宮本）

史料的には上記、播磨国（兵庫県）と美作国（岡山県）の二説に分かれます。吉川英治は美作説をとります。

江戸時代は播磨説が通説でしたが、明治に「東作誌」（美作国の東側の郷土史）が世に出てから美作説が一般説になりました。

今日では、武蔵が自分の著「五輪書」で生まれを播磨（兵庫県）と書いているのだから播磨（兵庫県）と考えることが妥当だとの意見が多くなっています。

播磨で生まれて美作に養子で行ったとの説もあります。

現在両県の地で記念碑等があり、どちらの住民もご当地説を主張します。

次に名前についてです。

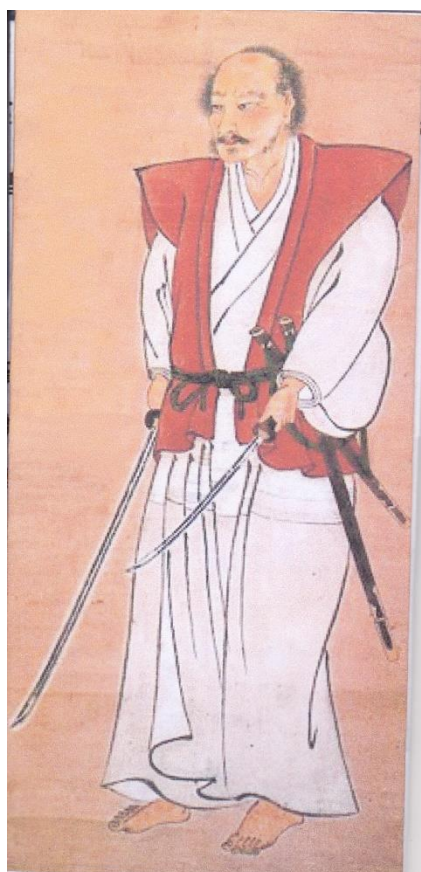
- 新免武蔵守藤原玄信 ^{はるのぶ}（「五輪書」）
- 新免の後裔武蔵玄信 二天（小倉碑文…武蔵の養子伊織が建てた武蔵の顕彰碑の文章）
- 新免武蔵藤原玄信、宮本も使うことがある（二天記）

新免は兵法関係で名乗り、その他武士としての名は宮本を名乗り、書画では二天の号を使っていたとの説が今日通説です。

父親のことは確かな史料には載っていません。

「二天記」には、“父は新免無二介信綱、新当流 十手を使う。

「武州伝来記」では、“宮本無二、十手が得意、武蔵は父親と喧嘩して播磨の母が方の叔父を頼る”



「武州伝来記」は武蔵没後70年を経て書かれたもので信憑性に問題ありと言われていません。

武蔵の死没年月日ははっきりしています。1645年（正保2年5月19日）です。享年62歳。生年は1584年（天正12年）。

容貌については左図をご覧ください。

武蔵の肖像図は何点か残っているのですが、島田美術館蔵の物が有名です。

白い小袖の上に赤い肩衣を着けて、右を向いて真っすぐに立っています。右手に長刀、左手に短刀を下段に軽く構えており、自然体

の構えと言えます。

この絵は武蔵没後すぐに関係者がプロの絵師に描かせたものと言われていま
す。絵から見ますと痩せ型の長身のようにです。

試合について史料的に一番信頼が高い自著の「五輪書」^{ごりんのしょ}によりますと、13
歳で初めて勝負し、新当流有馬喜兵衛に勝つ。16歳で但馬国の兵法者に勝つ。
21歳で京で数度の勝負。29歳まで諸国の兵法者と六十余度戦い負けを知ら
ず。”と記しています。

武蔵自ら著した「五輪書」では我々が良く知る京の吉岡憲法や奈良の宝蔵院流
との試合のことをふれていません。

“京で数度勝負した”とあるので、これは吉岡憲法のことかもしれません。

さらに皆が良く知る肝心の佐々木小次郎との巖流島での一戦のことは全く触
れていません。

巖流島の一戦のことは「二天記」（元ネタは「五輪の書」、「小倉碑文」）では
詳しく書かれており、岩流は“岩流小次郎”と名付けられます。

我々が知る名前“巖流佐々木小次郎”のフルネームは19世紀に入って武蔵
ついて書かれた物語でつけられました。

武蔵は結婚しませんでした。

1626年（寛永3年）伊織を養子にして、昵懇の明石の大名小笠原忠真に
仕えさせます。伊織は九州小倉に移封された小笠原家で家老になりました。

伊織は武蔵没後、小倉に武蔵を称えて顕彰碑建てました。この碑に上述で引
用してきました武蔵の経歴「小倉碑文」が記述されているのです。

武蔵の存命中のこの時代に大きな戦いが三つありました。即ち関ヶ原の戦
い、大坂の陣、島原の乱があります。

参戦はしたようですが確かな戦歴はありません。

宮本武蔵は青年期は兵法家として活躍しました。しかし30歳から熊本に現
れる59歳（1640年、寛永17年）までは断片的なことしか分かりまん。
晩年ははっきりしています。

1640年（寛永17年）に熊本に現れます。

武蔵を高く評価していた藩主細川忠利と家老長岡興長は武蔵を熊本の地に引
留めるべく相談しました。

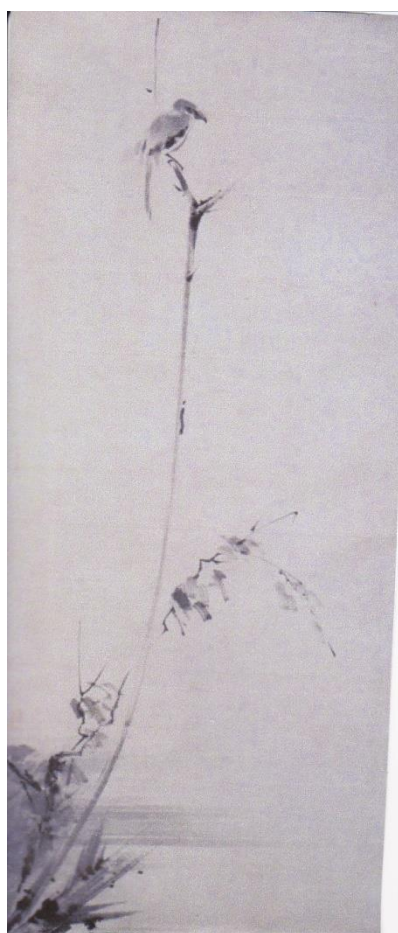
三百石で、住まいは熊本の千葉城跡に居宅を与え、客分待遇としました。

武蔵はこの処遇に満足して、兵法伝授を藩士に行い、又、絵画、工芸、茶道、連歌に熱心でした。特に絵画への評価は今日おいても高いのです。

熊本で亡くなる1645年までの5年間で、有名な絵画（墨絵）は描かれたのです。

武蔵の作と言われる絵は達磨の絵、馬の図、鴨の図等何点も残っています。

最も有名なものは「こぼくめいげきず枯木鳴鴉図」（和泉市久保惣美術館）が有名ですね。



左図をご覧ください。もず鴉が一本の細い枯れ木の上の方に止まって、同じ木の下の方中ほどにはりついている芋虫を狙っている図です。これが実にすばらしい筆タッチで美術専門家は高く評価し、重要文化財に指定されています。

しかしある専門家は“武蔵はうまいと言っても素人の絵描きである。他の武蔵の絵に比べ「枯木鳴鴉図」はうますぎる。専門家絵師のタッチである。この絵だけは武蔵の作ではない。”との主張もあります。

しかし武蔵の自筆か否かの判定は難しいそうです。

尚、永青文庫（細川家の美術館）にも同じ名で

「こぼくめいげきず枯木鳴鴉図」があります。図柄は少し違います。

武蔵が当時兵法家として有名人であったことは間違いありません。

大名では細川忠利（熊本藩主）、小倉藩主小笠原忠真、日向延岡藩主有馬直純や細川の家老長岡興長等々と知己あるいは友人は多数いました。

徳川家をはじめ兵法が好きな大名が召し抱えたいと申し出ましたが、俸禄のことで折り合いがつかず話は流れたとの逸話が残っています。

以上

2017年7月2日

梅 一声